



Title	アートとデザインの接点
Author(s)	木村, 光佑
Citation	デザイン理論. 1995, 34, p. 128-129
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53029
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アートとデザインの接点

木村光佑／京都工芸繊維大学

版画や彫刻を創作し、作品発表してきた自らの経験をふまえて、「アートとデザインの接点」を考察してみたい。

私がデザインと関わる機会は、これまでに三度あった。

最初は、京都市立美術大学（現・芸術大学）日本画科を卒業して、広告代理店に就職した時である。二度目は勤めて五年目に大病を患い、療養中に時間を持てあましてコラージュを制作したときであり、三度目は、1987年から京都工芸繊維大学に研究室を持った現在である。

三度の機会における時代の流れと、私自身の心情的な変化を見つめながら個人的体験を通して、デッサン、コラージュ、デザインをキーワードに振り返ってみる。

京都市立美術大学では、鉛筆デッサン、細密画デッサン、彩色法の手ほどきを受け、日本画の基礎をマスターした。

日本画は、物を大きなマッサとして見るのではなく、ディテールの寄り集まりとして物を把える。その彩色法は決して厚塗りではなく、色を何度も塗り重ねて一つの色を出す。

例えば、緑色を出すためには、初めに黄土色をひき、緑青の薄い色を塗り重ねることで、鮮やかな緑を表せる。色を重ねるときたなくなるのが普通だが、かえって鮮やかになる術は驚きであり、新鮮な発見であった。

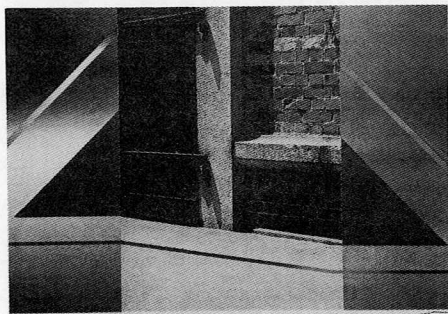
広告代理店では新聞広告、ポスター、パンフレット等のグラフィックデザインを担当した。机上でデザインをするだけでなく、それらが製品化される過程、即ち製版・印刷プロセスにも関与した。

美大で学んだデッサンは、対象物そのものだけを見るのではなく、対象物の向こう側にあるものを見て描くことだった。これをグラフィックデザインに置き換えると、メディアとなる印刷インクの知識はもとより、製版・印刷技術を熟知し、その可能性を試したうえで作品を制作して、見る人々の心を捉えることだと判断した。この経験が、その後版画を制作するきっかけになった。

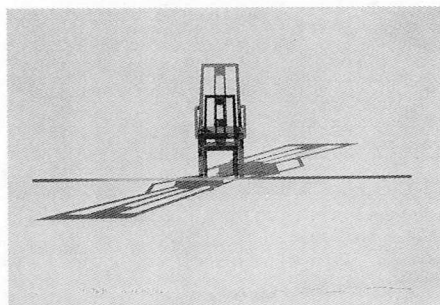
勤めて五年目、十二指腸潰瘍で入院した。コールドタオル状のものを下血し、医師から臨終を宣告されるほどひどい症状だった。昼も夜も輸血の続く日が一月以上に及び、いく



現在位置——存在 (PRESENT SITUATION-EXISTENCE) A
第1回ノルウェー国際版画ビエンナーレ展・国際大賞受賞作



アウト オブ タイム (OUT OF TIME) 81-IS
第10回クラコウ国際版画ビエンナーレ展・ゴールド・メダル
受賞佳作



孤独の輪郭 (LINES OF SOLITUDE)
第7回現代日本彫刻展大賞受賞作の原画

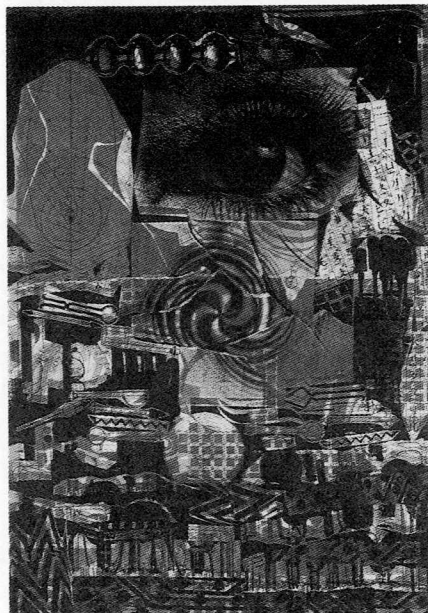
らか元気を取り戻した。時が過ぎ去るのを早いと思ったことはあっても、遅いと感じたことはなかった私にとって、この時の思いがけない入院生活が人生を瞬時止めたのだった。

外科病棟に入院していたが、手術ができる状態ではなかったので、内科で気長に治療しようということになった。「なるようになれ」と半分あきらめの気持ちが生まれ、退屈しのぎに絵を描き始めた。

スケッチや彩色は、病人にとって、大変なエネルギーを要する作業である。何かいい方法はないだろうかと考えて、雑誌や新聞から写真やイラストを切り取り、それらを貼り合わせて作品を作ることにした。切り取った写真それ自体はそれぞれのテーマを語りかけているが、これを寄せ集めることで、違った世界が表現できることに気づいたのだ。

これがコラージュという技法で呼ばれていることを、後で知った。

今思い返してみると、この時の病気が人生を大きく変えたように思う。サラリーマン時代の生活空間を抜け出し、同じ一生なら創作の世界を目指そうと考えるきっかけになったのだ。それからの数年間は、輸血による肝炎の感染で季節の変わり目になると、必ずジン麻疹がでた。そのような生活だから病身に合わせたペースで、妥協しながらコラージュのような断片的な日常生活を送った。焦りはあったが、自然の流れに人生をまかせるしか、私



アウト オブ タイム (OUT OF TIME)-24
第2回英国国際版画ビエンナーレ展・
リチャード・ゲインズボロウ・メモリアル賞受賞作

の生きる道はなかった。

現在研究室を持っている京都工芸繊維大学では、版画・彫刻・壁画などの制作と、それらのアートをデザイン・映像にどのように生かせるかを、研究テーマにしている。

私はデザインをする場合も芸術作品として制作し、逆に芸術作品を作る時には時代感覚をキャッチし、それを反映させようと試みることが多い。アートとデザインとの間の境界は、私の中ではかなり曖昧になっているといえよう。芸術作品とデザインは何の矛盾もなく、結びつくのである。

アートとデザインの接点の模索が、私の一生のテーマであり、今後もそれを追求しようと考えている。そしてデッサン、コラージュ、デザインは作品を制作するうえだけではなく、自分自身の人生そのもののキーワードといえるかも知れない。

生きていくことそのものが芸術のようなものだし、人生は自分にとっての最高のデザインだからである。